

招待・特別講演

講演者のプロフィール

田中 ゆかり (たなか ゆかり)

【略歴】

1964 年生まれ。神奈川県厚木市生育。日本大学文理学部教授。博士（文学）。専門は日本語学（方言・社会言語学）。早稲田大学第一文学部卒業後、読売新聞社に記者職として勤務。退職後、早稲田大学大学院文学研究科博士前期課程に進学。1996 年同後期課程修了。早稲田大学文学部助手、日本学術振興会特別研究員(PD)、静岡県立大学国際関係学部専任講師などを経て、2006 年度より現職。北京日本学研究中心派遣教授（外国人専門家）、コロンビア大学東アジア言語文化学部客員教授、カリフォルニア大学ロスアンゼルス校アジア言語文化学部客員教授、文部科学省教科書用図書検定調査審議会委員・国語小委員会部会長代理、公益財団法人博報堂教育財団「博報日本研究フェローシップ」審査委員、文部科学大臣及び文化庁長官諮問機関・文化審議会臨時委員（国語分科会）などを経験。2020 年度より日本大学文理学部グローバル教育研究センター長。

【主要業績】

《単著》

『首都圏における言語動態の研究』（笠間書院、2010）

『「方言コスプレ」の時代 ニセ関西弁から龍馬語まで』（岩波書店、2011、第 22 回高知出版学術賞受賞）

『方言萌え！？ ヴァーチャル方言を読み解く』（岩波ジュニア新書、2016）

『読み解き！ 方言キャラ』（研究社、2021）

《共著・編共著・共編著》

『なっとくする統計』（共著、講談社、2003）

『講座 社会言語科学 6 方法』（共編著、ひつじ書房、2006）

『方言学入門』（共著、三省堂、2013）

『日本のことばシリーズ 14 神奈川県のことば』（編共著、明治書院、2015）

「方言」で読み解く戦後日本語社会

田中 ゆかり (日本大学文理学部)

2000 年前後を境に、日本語社会は「方言」に肯定的な付加価値を見出す傾向が一層顕著となった。近代期の標準語政策下では「方言」は撲滅の対象であり、第二次世界大戦後も高度経済成長が一服する 1970 年代まで「方言」は一般には長く「スティグマ」であった。

しかし、テレビ等の普及により共通語が誰でも使える「フツウのことば」となった 1980 年代に大きな転機が訪れる。共通語運有能力を十分にもつテレビネイティブ第一世代である 1960 年代生まれが青年期を迎えるにあたって、「方言」が誰でも使えるわけではない「トクベツなことば」としてその付加価値が意識されるようになる。続いて、1990 年代の後半から 2000 年代前半ごろには、インターネットの普及に伴う「打ちことば」の一般化により、「方言」がキブンを表現するコミュニケーション・ツールとして注目を集めるようになった。

これらが相まって、日本語社会には、従来「在来の土地のことば」であった地域方言に、方言ステレオタイプに基づく新たな用法が加わる。併せて、「生活のことば」であるリアル方言に編集・加工が施されたヴァーチャル方言を用いるコミュニケーションも広く認められるようになった。2000 年代以降の日本語社会において前景化した「方言コスプレ」という現象や、「方言萌え」という感覚はその現れであり、2010 年代半ば前後に登場した「方言萌えマンガ」などは、それらの日本語社会に共有される言語感覚が投影・凝縮されたコンテンツ類といえる。

2011 年の東日本大震災を契機に、デジタルコミュニケーションの手段は、携帯メールからコミュニケーションアプリや SNS への代替わりが進んだ。しかし、キブンを表現するリソースとしての立ち位置を獲得したヴァーチャル方言は、一層の仮想化を伴いつつも、コミュニケーション・ツールの一翼を現在も担い続けている。その典型が LINE の方言スタンプである。デジタルネイティブ世代は、自身のふだんのことば遣いの方言水準とは異なる濃厚なヴァーチャル方言を、あたかも「自然に」ネット動画などのコンテンツに活用する。「方言」を用いることが日本語社会への自己アピール策として有用であることをよく知っているからである。

一方、「方言」に肯定的な付加価値を見出す傾向は、リアルな伝統的方言の保存・継承にはほとんど貢献していない。従来の「共通語中心社会」以外の地域においても、そこで生活する全国各地の若年層の少なくない層が自身のことばを「方言」と捉えることが困難になっている。

本講演は、戦後 80 年を迎えようとする日本語社会の変遷を「方言」を基軸に多角的に捉えようとする試みである。媒体・手段や教育といった言語外の社会的要因とそのインパクトを踏まえつつ、日本語社会の構成員の言語意識の反映あるいは凝縮されたものとしての各種コンテンツ類における「方言」表象を扱う質的分析や、日本全国に居住する人々の方言と共通語に対する意識を大規模な調査データに基づく量的分析から捕捉し、戦後日本語社会の変遷をたどる。